

近藤勇

井上反一郎

近
藤

勇

井上友一郎 著



昭和二十八年一月二十四日 印刷
昭和二十八年一月二十八日 発行

定価 貳百参拾円

地方
売価 貳百四拾円

勇

著者 井上友一郎

東京都新宿区矢来町七十一番地

発行者 佐藤義夫

東京都新宿区矢来町七十一番地

発行所 株式会社 新潮社

電話(33)二一〇一五
振替東京八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

図書印刷株式会社
Printed in Japan

目次

武蔵野	五
天然理心流	一六
芋道場	二七
風雲急	四一
浪士組	五七
嵐の前	七四
白刃の舞	九六
龍虎激闘	一〇九
血と血	一二三
わかれ道	一五五

元治元年	二四
池田屋の変	二五
戦塵	二六
乱れ飛ぶ星	二九
恋か剣か	三五
高台寺党	三一
暗い黎明	二七

装幀 福田豊四郎

近

藤

勇

武蔵野

霧が深い。

夜が明け初めて間もないが、日の出の光りは榛の木林にさえぎられて、周囲一面、どんよりと薄暗い。間もなく龍源寺の明け六ツが聞えるだろう。

しかし、勤勉な武州上石原の百姓たちは、夙くの昔に寝床を出て、それぞれ野良へ出る支度にかかる。血気盛んな十五六歳の若者たちは、

『よし。けさは宮川道場の朝稽古に、ちょっくら出るべい……』

と、鋤鍬の野良道具のほか、竹刀に面小手をぶらさげながら、夜あけの畔道を急いでいく。

宮川道場は、甲州街道の片ほとり、榛の木林と桑畑をめぐらした百姓家だが、主人の宮川久次郎は、野良仕事より、とかく竹刀を振り廻し、武術を論じるのが大好きとある。

近年、自家の横手に、ちいさな安普請の道場を建てて、わざわざ江戸から出稽古に廻ってくる剣客たちを、三日、五日と

泊めて、自分も習い、近在の若者たちも呼び集める。

好きこそ物の上手の喩えて、いまは久次郎も、剣道は一応こなせる。ズブの素人に、ちよいとした手ほどき位はやれるようになっていいる。それが久次郎の道楽だから、この界限でも『剣術づかいの宮川さん』で有名になつてしまつた。

夜がすっかり明け切つた頃、この宮川道場は、えいッ、やア、と勇壮な掛け声と、竹刀のぶつかる烈しい音で、威勢のいいこと限りがない。

稽古は、久次郎がつけることもあるが、長男の音五郎、次男の惣兵衛、三男の勝太が、代る代るやることもある。さすがに蛙の子は蛙で、久次郎の子供たちは、三人とも相当強い。

しかし、習いにくる百姓たちが、最も嫌つたのは三男の勝太である。勝太は、ことし十五歳。中肉中背というところだが、いわゆる堅太りで、ガッチリした骨組だ。眼が猫のように可愛くて、口が大きい。それも、少々の大きさではなく、楽に自分の握りこぶしが入るほど、バカ大きい。だが、本人は自慢そうに、

『昔、加藤清正という人は、このおいらほど、大きな口だつたそうじゃ。おいらも、加藤清正のように、えらい人間

になりてえや……』

と、子供らしいことを云つてゐる。

日常、勝太は、おとなしく、酒も飲まぬし、喧嘩もしない。人と会つて喋るときも、おだやかな物腰で、だいいち、その話声も静かな小聲だ。

ところで、いざ立ち会ひの際となると、この勝太が、実に、物凄いい掛け声を出す。

それも、腹からしほり出すように凛烈で、気の弱いのは、この掛け声ひとつで、気おくれがした。

『おうッ!』

と、叫んで、勝太は、大概、正眼に構えてゐる。そして、機を見て、ぴいんと相手に、小手を入れると、十人のうち九人までは、みんな竹刀を、ぼろりと落した。

小手を入れるのが勝太の得意だ。お蔭で、相手は、殆んど手首がしびれあがる。

朝稽古も、そろそろ終る。

半里一里の遠方から習いにくるのは、もう夙くに引きあげたが、上石原の地内の者は、まだ五人六人と道場に残り、熱心に竹刀をふるつて、汗だくである。

勝太は、けさも上級者十人と立ち会ひをやり、十人とも小手を入れて、竹刀を叩き落した。

『ああ、蒸し暑い……』

季節は早春。

本来ならば、肌寒い早朝のことであろうが、勝太の稽古襦袢の下は、べつとりと汗ばんでゐる。

勝太は、濡れ手拭いで背中を拭おうと思つて、道場を出た。井戸は道場の横手にある。

用意の手桶に、つめたい水をザブザブ汲んで、双肌ぬぎで脇の下を拭つてゐると、

『よう、勝太さん……』

と、いきなり檜葉垣のむこうの路上から声がした。

勝太は、のびあがつて、その姿をたしかめると、それは日野宿石田村の歳三である。しかし、現在、歳三は江戸へ出て、上野の松坂屋という呉服屋に奉公中だと聞いている。それが、どうして、今頃、こんな上石原に現れたのか……。

『どうした? ふいに、こんなところへ……』

勝太はニコリと笑いながら、その檜葉垣の上から覗く眉目秀麗な色白の歳三を、手でさしまねいた。

歳三はのつそりと入つて来たが、勝太より一ツ齡下の十四歳とは云うものの、もとより身なりは町人掙えの単衣の着流し。而も、紺の前垂れがけで、雪駄穿きだ。まるで、

江戸の商家の近所でも出歩くような恰好である。

『どうしたんだ?』

勝太が、前髪の頭のとつぺんから足のさきまで、なめるように眺め廻すと、歳三は何となく卑屈な態度で、

『相変らず、やつとるな』

と、手で竹刀を握る真似をする。

『うん』

『時に、お父つあんは、おいでなさるか……』

『いるよ。——しかし、何か用か』

『うん』

と、頷いてはみるものの、どうも何か吹ッ切れない面持である。思ひなしか、その美しい、つぶらな瞳が、或る種の屈託事と思ひ悩んでいるようだ。

勝太は、じいツと歳三をみつめながら、

(何と美しい顔だろう。婦女子のようだ……)

六分の羨望、四分の軽侮で、そう考える勝太の胸には、ふいに、びいんと直感的にきたものがある。それは、歳三の女出入りだ。

そのとき、歳三が、ひよいと云った。

『勝太さん。実は、おいら、ゆうべ夜中から九里の夜道を歩いて、いま、ここまで帰ってきたんだよ……』

『何で?』

『いや、思案にあまることがあつて帰るんだが、それが又、一人では帰りにくいわけもあるのさ』

と、歳三は、いよいよ心細げに、伏目になる。

『しかし、それは、どういうわけだ?』

勝太は、汗もすつかりおさまつたので、もとのように稽古襦袢に手を通して、袴の紐も締め直した。

すぐ傍の道場では、まだボンボンと竹刀の音が響いている。

『わけは、いろいろ有るんだが、どの道、おいらは、もう江戸の奉公は止めた。だいいち、先方も、おいらのような人間は置いてくれん。そこで、勝太さん、あんたから一つ、お父つあんにお願ひして、おいらが石田村まで帰れるように、とりなしてもらえんだろうか』

歳三は、ようやく腹をきめて、本音を洩らした。けれど、肝腎のその事情は、まだ何も説明しない。

勝太は強いて、いやな事を喋らせようとは思わなかつた。

『そうか。——それでは、おいらから取次いでやつてもいいが、それより、歳三さん、君が一つ、直かにおやじと会つて話してみたら……』

『いや、そりや、いかん。そいつは、怖いよ』

と歳三はあわてて、

『もちろん、結局は会わねばならんが、その前に、あんたから、お父つあんの御意向を聞いてもらいたいんだ』

『そうか……』

『是非、たのむ。この通りだ。後生だから、お父つあんにお願いしてくれ。恩に着るよ』

歳三は、単に幼馴染の勝太の父というより、子供ながらも、十、十一で、剣術を習いに来た先生である。それだけに、えらく頼りにもする代り、怖い人でもある。

『しかし、歳三さん、おいらからおやじに頼むとなれば、一通り、わけも話さねばならないが、一体、どういいうきさつなのだ？』

『不身持さ』

と歳三は、やや自嘲的に軽く呟く。そして、ふいに淋しげに笑いながら、

『あはは。実は、勝太さん、おいらは、奉公先の女中と一しよになつてしまつて、相手のお腹が大きくなつたんだよ』

『そうか。……しかし、何のそれしき……』

勝太がケロリと、そう云うので、

『冗談じやない。おいらの身にすりや、何のそれしきと、打ツちやつとくわけにはいかんよ。この際、何とか話をつ

けて、その女中の身の振り方も考えてやらねばならんし、そもそも、おいらも、そんな事情で、まさか奉公先にいることも出来やしない。そこで、何はどうあらうとも、一先ず村へおちついてから、前後の策を思案しようと思つてゐるのだ』

『よしッ』

と、勝太は事もなげに頷いた。

『それじや、歳三さん、ちよいと、ここで待つてくれ。もう、朝稽古も終る頃だし、おやじも一ぶくしてる時分だ。』

——おいら、ちよつと、たのんでくるよ』

『たのむ』

歳三は、感謝のまなざしで、そんな勝太の背を目送した。

勝太は、事にこだわらない性分だから、平然として、もとの道場さして引返していく。

歳三が心細げに肩をつぼめて、井戸端の脇に立つてゐると、稽古を終つた若者たちが、二人三人と喋りながら、面小手、竹刀などを担いで、引きあげていく。

いずれも近所の民家の子弟で、中には十から八ツ九ツくらいの子供まで混つてゐる。

(どいつも、こいつも竹刀なんか振り廻しておつて、一体、どうしようつて料簡だらう……)

と、歳三が打ちひしがれた心のなかで、そんなことを呟いた。

じつさい、この辺を中心に、多摩一帯の武道熱は相当なものである。身は、一介の水呑百姓でありながら、彼等は二里三里の遠路もいとわず、わざわざ剣道を習いにくるのだ。われもわれもと、相争つて習つてゐるが、将来、みんなが侍にでもなろうというのか……。

ことしは嘉永元年である。

去年は、又々、幕府が浦賀、千駄崎、猿島などに砲台を築造したというが、外船の来航は日を追うて頻繁になるらしい。下手をすれば、いまにも一合戦免れないような物騒な世の中になつてきている。さればこそ、腕に相当実力のあゝる奴は、何百年來の格式やしきたりに囚われることもなく、一挙に人の頭に立てるような情勢も生じてきたのだ。

江戸を食いつめた御家人たちも、苦しまぎれに裕福な町家や農家の子弟を養子に入れて、ひそかに不如意な生活苦を切り抜けようと喘いでいる。

寛永の昔はもとより、文化、文政の頃までも、まだ、これほどの世の中ではなかつたようだ。きのうまで鋤鋤をふり廻していた百姓も、きょうは忽ち腰間に大だんびらを差し挿み、ぶっさき羽織に、野袴を穿いて歩くような御時勢

になつてきた。それが多摩地方の武道熱に拍車をかけていることは疑いがない。

(もう、こうなりやア、出世の早道は剣道か学問かな……) いま、十四歳の歳三の脳裡にも、そういう打算が電光のようにきらめく。

かつて歳三も、つて、をたよつて石田村からこの上石原まで、剣道を習いに来たことはあつたけれど、どういふもので、途中で倦んで江戸の呉服屋奉公に入つたのだ。いやなもの仕方がないから、将来、せめて小金でも握ろうと算盤玉を弾いてきたが、今度、重苦しい女出入りによつて、それも又、御破算である。勝太に頼んで、この宮川道場の先生から生家へ一応とりなしを得たとしても、さて、それから草深い石田村で、どうして暮そうかと考えると、歳三の眼前は真暗である。

(それとも、もう一度江戸へ戻つて、どこか他の呉服屋へでも、もぐり込もうか……)

歳三は迷つてゐる。

本当云えば、歳三は江戸が好きだ。江戸には、滅法、美しい女がいる。そして、妙に歳三は女からチャホヤされる。その気分は悪からう筈がない。さればこそ、十四歳の奉公中の身で、早くも主家の女中を孕ませたりしてしまつたの

である。それでも、彼は繁華で、美しい江戸の町家暮しに、見果てぬ夢を抱いていた。

『歳三さん、歳三さん……』

ふいに、そのとき道場から顔を出した勝太が呼んだ。

歳三はドキドキしながら、勝太のいるほうへ歩いていった。

『さて、話はどうだった？』

と、歳三は神経質な瞳を、勝太の面上にそつと注いだ。

勝太はゆつくり頷きながら、

『おやじには話し込んだよ。——ところが、おいらは、こう云われた。成程、歳三さんも困るだろうが、その江戸でお腹を大きくしてしまつた女中の件を、いまから、あんたが、もう一度江戸へ引返して充分に処置付けてくる必要がある。女を、そのまま、おつぽり出してきた歳三さんには、このままでは、どんなお世話も出来かねるというわけだ……』

『うーむ』

歳三は唸つてしまつた。成程、云われてみると、その通りだ。いくら十四歳の若さでも、その辺の道理はよく呑みこめる。

勝太は更に言葉足した。

『おやじは云うんだ。——血迷つて、卑怯未練なことをしちゃアいかん。将来、もし出世したい人間なら、どんな些細なことでも、卑怯なことをするな、と云うのだ。たとえ相手が女だろうが敵だろうが、要するに、うしろを見せてコソコソと逃げるのは面白くない。この際、ちゃんと本人の手で処置を付けねばならん、と云うのだ。武道でも色恋でも、いやくも大丈夫は、立派にやつてのけねばいかん、というのが、おやじの意見だ』

『そうか』

と、歳三は考え込んで、

『すると、ちゃんと女の処置を付けてくれば、先生は、おれの家にとりなして下さるというんだな』

『それはもちろんだよ』

『そうか』

もう一度、歳三は深い感慨に沈むらしく、じいッと胸組みして立つていたが、程なく決然として面を起した。

『よし、勝太さん。おれは、これから江戸へ引返すよ』

『うん、行くか』

『行つてみる。——そして、先生のいわれるように、必ず女の処置は付けてくるさ』

『本当に付けられるか』

『付けてみるよ。そして、その上又ここへ戻ってくるが、それからあとのことをお願いするよ』

『うん、それは引き受けた。あんたの宅へも、きつと充分なとりなしをするだろう。場合によつては二日や三日は、ここで泊り込んで行つてもいいぜ』

『ありがとう。——しかし、どつちにしても、おれは江戸へ引返してみる。ところで、勝太さん』

と、歳三はちよつと声を落して、

『いいか。おれは必ず一切の処置を付けて、もう一度、ここへ帰ってくるぜ。しかし、先生は、おそらくおれが、もう一度、上石原へ戻つて来ないだろうと、多寡をくくつていなさるらしいが……』

『さア、そういうわけでもないだろう』

『いや、分つてる。おれには先生の腹が充分読める。先生は、おれのことを成すところない文弱の徒と思つていなさるんだ。そう思われても仕方ないよ。しかし、おれは途中で剣道を止めてしまつたけれど、まだ勝太さんや兄さんたちとも、それほど腕に相違はないと思う。——江戸から戻つてきたら、一ぺん、おれの手のうちを見てくれよ……』

妙なところで、歳三は虚勢を張つて、それから勝太が朝飯の芋がゆでも食べて行けと勧めたのに、それを振り切つ

て、すぐさま宮川道場を出ていった。

ゆうべ、歳三が夜道を歩いてきた道のりは九里。

そして、これから又その同じ道を、江戸の上野広小路まで歩いていくのだ。

『おーい。きつと戻つて来いよ……』

勝太は、檜葉垣の傍へ近付き、いまでも桑畑の中の道を、尻端折つて立ち去つていく歳三のションボリした姿に、声をかけた。

『おう』

と、歳三も手をあげて応じていたが、勝太はそんな片意地めいた歳三に、何となく一抹の好感を覚えていた。

勝太は、道場へ引返して、父の久次郎にその成りゆきを報告すると、久次郎は意外な眼をして、

『なに、芋がゆも食べもせず引返した？ うーむ。それで、もし本当に話を付けてもう一度ここへ戻ってくる男なら、見どころがあるんじゃないか……』

『あいつは何か、妙に反抗心を起しおつたようです。自分が、いやに輕蔑されてるらしいと思つて、心で、カッとなりおつたらしいです。——ろくに竹刀はやつておらぬが、まだ私とも五分の立ち会いくらいは、やつてのけるような口ぶりでございました。江戸から戻つて、一度、手のうち

を見てくれとも云い捨てて行きましたが……』

『あははは』

と、久次郎は笑いだして、

『まさか江戸の呉服屋で、剣道の稽古をしていたというわけでもないだろう。しかし、意地の強いことをいう奴じや。』

——本当に戻つてくればいいが』

『まさか私も、歳三には負けないでしよう。それなら二年も三年も無駄めしを食べていたことになります』

『しかし、わしは薄々覚えていたが、あの子の剣術は、うまみなんか全くないが、子供ながらも、妙に度胸のいい太刀捌きを見せておつたぞ。しかし、いかにも、いやいや習つていたらしい形跡だ。正念が入つておらん』

『いくら何でも歳三には負けません。それくらいなら、私も芋でも造つていたほうが余ッほどましです』

『あはは。——しかし、勝太。武道の修業で、そのように多寡をくくることは禁物だぞ。根拠のない楽観は、毛ほども抱くことはならん。もし、万一、あの婦女子のような歳三が、江戸で呉服屋奉公しながら、千葉周作先生のお玉ヶ池へでも夜稽古に通つていたとしたら、どうする？』

『さア、そのような根氣のよさはあの男にはありません。』

奴は、剣道がきらいなのです……』

『近頃、江戸でも、町人や火消し人足までが盛んに竹刀の稽古に打ち込んどると云うことじや。——お前も、まだまだ大きな口は利かれんぞ』

『でも、まさか呉服屋で算盤玉を弾いたり、帳面付けをしていたような人間には、負けられません』

『まア、いい。——とにかく、あの子が帰つてくるのを待つとしよう』

久次郎は、わざと勝太の慢心をおさえる気持で、ぬかりなく、一種の心構えを植えつけることに努めた。

中一日おいた翌々日。

江戸へ引返した歳三が、また九里の道を歩き通して上石原へ舞い戻ってきた。

『勝太さん。——お蔭で、女の話は付けた。先方の実家へ一しよに行つて、左官屋をやつてゐるおやじとも会つてきたが、生れる子供は、むこうで引き取つてくれるそうだ。そして、おいらと一しよになることも、先方が大反対だ……』

歳三は勝太の顔を見るなり、明るく両眼を輝かせつつ、その談判のなりゆきを詳しく説明して聞かせた。

『そうか。それは何よりよかつた。それなら、うちのおやじも欣んで、あんたの家へきもいりはするだろう』

『ありがとう。——お蔭で、おれも男になれた。ちよいと上石原へ立ち寄つたばかりに、おれも立派な世渡りがさせてもらえて、実に運のいい目を拾つた。しかし、素人の女にはもう懲り懲りだよ……』

さすがに、その日、くたびれ切つた歳三は、勝太の家で供される夕飯を認めると、宵の口からぐつすりと眠つてしまつた。

翌朝、勝太が朝稽古のため、暗いうちから起き出して、道場脇の井戸端で、つるべの音をさせていると、歳三が母家から、のつそりと起き出してきて、いきなり、竹刀を構える真似をした。

『勝太さん。一手、やつてくれるか』

『なに、立ち会いか』

と、勝太はいくらも緊張して、じろりと歳三の色白なやさしい顔を見つめた。

『うん。いや、立ち会いなんて大げさだけど、近頃、どのくらい腕に距たりが出来おつたか、試してくれんか』

『よし。一つ、やつてみよう……』

二人は、それから薄暗い井戸端で、交る交る顔を洗い、口を漱いで、まだ星の光つている未明の空を仰ぎながら道場へ入つていった。

道場には、もう数人の門弟たちが詰めかけていて、それぞれの相手を選んで、勇ましい竹刀の音を響かせている。

長兄の音五郎が、初心の若者に竹刀の持ち方などを教えていたが、程なく父の久次郎も稽古姿で姿を見せた。

『勝太さん。一つ、やろう……』

道場の片隅に正坐したまま、少時、この場の状況を見渡していた歳三が、そつと勝太の稽古襦袢の腕を小突いた。

『よし。——だが、あんたは、その恰好では……』

勝太は立つて、早速、手持ちの襦袢、袴、そして面小手の類を、片隅の備え箱から抱えてきて、

『ここで支度するといいや。手拭いはおいらのを貸そう』

『よし』

と、歳三は苦笑して、その装束を身に付けながら、勝太に云つた。

『手加減しないで、存分にヤツつけてくれ。たとえ、どんなに弱かろうと、どれだけ腕にちがいがあるか、それをハッキリ、このおれに見せてくれ』

『よし、やつてみる』

面小手胴と正式に身を固めた二人が、竹刀をぶらさげて道場の板の間に降りたので、その辺で竹刀を打ち合つていた連中が、何となく気配を察して、脇へ退つた。

『やるのか、勝太……』

と、正面の師範台から、父の久次郎が笑いもせずと呼びかけたので、二人は思わず、うやうやしく一礼した。

道場の障子のおもてが、そろそろ白く明るい外光を受けながら、朝の気配を漂わせている。

裏の納屋では、鶏が甲高く鳴き声を立てていた。

『それでは、行こう』

勝太は歳三に正面から向き合うと、黙礼するなり、ぬうツと引き緊つた腰をあげた。

歳三も立ちあがる。

『よしッ……』

『くそッ』

と、勝太は、じいッと竹刀を正眼にかまえたままだ。親ゆずりの孫弟子ながら、流儀は天然理心流。

歳三も正眼である。

万象声を呑むひとときの静寂がつづく。

二本の竹刀が、時折、せきれいの尻ッほのように、ピクッピクッ……と小刻みに、その尖端を動かせるのみで、仕掛けに入らぬ。

道場に詰めかけていた門弟どもは、べつに正式の手合せとして何のお触れも受け取っておらぬから、最初は、さま

で行儀よくこの兩人を見守つてはいなかったが、次第に、惹き入れられていく自分を感じ、そつと居住まいを改めるようになった。

鶏が鳴いている……。

『えいッ』

と、一瞬、勝太独得の猛然たる掛け声が吐き出された。

ピクッ……と歳三の竹刀のさが動いたけれど、そのままである。

二本の竹刀が向き合されたまま道場の板を、そろそろと左右に廻る。

又、鶏が鳴く。

見守る久次郎がニヤリと笑つた。

と、その刹那だ。

『えいッ』

再度、ギクリと相手の心魂に響きわたる勝太の声が出ると同時に、竹刀が一種の鳥翳となり、さつと一同の視界に光ると、まさに一本、強か歳三の小手に入つた。

『うむ』

ビシリと鈍い音がして、歳三の左腕が硬直すると見るや、矢庭に、それがひらりと伸びて、握つた竹刀を、ぐんと横殴りに勝太の横面へ一打ちくれたが、手が痺れたのか、勢